新今昔物語

第38話

古堤街道を往く①

「古堤街道発展の歴史」

大阪・京都・奈良の三都に挟まれた河内平野には、古くから各都市を結ぶ街道が発達してきました。大東市域には、大阪と奈良を結ぶ古堤街道（ふるつつみかいどう）、河内平野を南北に結ぶ河内街道、京都と高野山を結ぶ東高野街道（ひがしこうやかいどう）の三つの街道が通っていました。今回から小欄では、これらの街道を歩きながら、そこに残る文化財とそれにまつわる逸話などについて紹介していきます。まずは、市内を東西に走る古堤街道から歩いてみましょう。

古堤街道は、大阪の京橋を起点として旧大和川・寝屋川の北堤防上を横断し、角堂浜（すみのどうはま）（現在のＪＲ住道駅付近）で寝屋川を船で渡った後、中垣内から龍間を越えて生駒・奈良方面へ向かう道でした。この地域はもともと水上交通が盛んでしたが、18世紀初めの大和川付け替えと深野（ふこの）・新開（しんかい）両池の新田開発後は、田園地帯を横断する陸上交通が発達しました。古堤街道のルートもこの時期に形成されたと言われています。

住道本通り商店街に立つ「古堤街道」と刻まれた道標

江戸時代には、この道は「中垣内越」「生駒越」「古堤路」などの名称で呼ばれていましたが、明治20年代頃に現在の呼び名に定着したようです。堤防上の道であることに由来する名称でした。また、古堤街道は別名「こでかいどう」とも称され、今でも年配の世代にはこの名称で呼ぶ人がいます。

古堤街道は、大阪から奈良・伊勢方面に向かう人々が利用したほか、江戸時代中期より盛んになった野崎参りの参詣コースとしても利用されました。現在でも街道沿いにはこれらの行き先を示した道標が立っています。

次回は、諸福を出発して古堤街道を東に向かいます。

（生涯学習課）